

# 7月1日号 教育委員会だより ～学(まなぶ)～

## コロナ禍に負けない知立っ子 ～新しい学びのかたちの模索～

コロナ禍が続いていますが、そんな中、知立の子どもたちは元気に学習に励んでいます。今回はその様子の一部をご紹介します。

### ①子ども同士の学びの充実

タブレット端末が一人一台配付され、子どもたちの学びのかたちは激変しました。今では、授業中にタブレットを、鉛筆やノートと同様の「学習用具」として活用する子どもたちの姿が、どこの教室でも見られます。知立市では現在、ロイロノート・スクールという授業支援アプリを導入しています。このアプリを活用し、子どもたちはタブレット上で考えをまとめるためにカードを作成します。カードはタブレット間で手軽に共有することができるため、互いの意見を交換し、多様な意見に触れることが可能です。今後は、共有した意見を教師がどのように「深い学び」へとつなげていくのか、その方法についての研究を進めたいと考えています。

### ②オンラインによる学校間交流や社会見学

社会では、オンラインによる会議や研修が日常的に行われるようになりました。教育現場においても、オンラインによる学校間交流・社会見学などが行われています。先日は、八ツ田小学校において「あいち朝日遺跡ミュージアム」(清須市)のオンライン社会見学が行われました。朝日遺跡は、県内で有名な弥生時代の遺跡です。当日は、ミュージアムの学芸員の方に遺跡についての解説をしていただき、質問にも答えていただきました。6年生の子どもたちは、教室にいながらにして朝日遺跡の魅力に触れ、弥生時代についての知識を深めることができました。もちろん、これからも実地体験を大切にしていますが、場合によってはオンラインの活動も上手に取り入れ、よりよい学びが実現できるように努めていきます。



オンラインによる社会見学(八ツ田小)

### ③多文化共生をめざして

知立市では、かねてより愛知教育大学と連携しながら子どもたちの教育について実践を積み重ねてきました。そして、令和2年度からは「多文化共生に向けた日本語指導の充実に関する調査研究」を進めてきました。具体的には、知立東小学校と知立南中学校において、外国にルーツをもつ児童生徒への日本語指導の新しいかたちを模索し、研究授業を行ってきました。7月に知立東小にて行った社会科の研究授業では、国籍に関係なく子どもたちが協力しながら調べ学習をする姿や、グループ活動において積極的に日本語で意見を発表する姿が多く見られ、研究の歩みの確かさが垣間見られました。現在、愛知教育大学との連携は、知立市の教育を考えたときに欠かせないものとなっています。これからも連携を深めつつ、多文化共生をめざした教育の充実をめざします。

\*

タブレット端末の導入により、子どもたちの活動の幅が広がったのは確かです。しかし、これまで大切にされてきた子ども同士の学びの大切さは変わることがありません。知立市では、これまで培われてきた指導方法と新たな授業展開との一体化を推進してまいります。